オーソリティ関係における敬意の問題

—Blau, Presthusの議論を中心に—

Problem of Respect in the authority relationship

Focusing on the discussions of Peter Blau and Robert Presthus

藤田哲司

FUJITA Tetsushi

The problem of respect(deference) is one of the central points in relation to the authority relationship. This Paper examines the discussion of Blau and Presthus with respect to the problem of respect.

Both of them had two weak points in common. (1) They lacked the objective causal explanation of "Respect's occurrence". (2) They only discussed the authority relations within the limits of one organization.

This paper tries to resolve these points at issue, and shows the possibility of the Respect's discussion in the authority relationship.

1. 序

1- (1) オーソリティ行使・正統・敬意

「オーソリティの2つの規準(two criteria)は、正統な命令に対する自発的応諾(voluntary compliance with legitimate commands)と、命令に先立って生じる判断停止(suspension of judgment)」と特徴づけたのは、Blau & Scott(1963, p.28)である(1)。この記述は、オーソリティ(行使)の特徴(必要条件)をよく示している。しかしながら、彼ら(とりわけBlau)による、それらがどのように起こるのかという説明は、「判断停止」に関しては行われておらず、後に論じるように「自発的応諾」については、脆弱なものである。そこで、本論は、自発的応諾と判断停止のメカニズムを解明したい。それにあたって、敬意という変数(要因)を用いる。その理由の第1には、敬意要因によって、前述のメカニズムがより明瞭になるためである。第2に、2つの規準を成り立たせている、敬意的要因にこそ、パワーや説得といった隣接概念とは異なる、オーソリティ概念の独自性があるからである(2)(3)。

ただし、前述のメカニズムに対する筆者の想定そのものについては、別稿で論じた(4)。そこで本論では、「オーソリティと敬意」に関する先行研究における「問題点」の指摘を主として行いたい。本論でBlauとPresthusの敬意論をとりあげる理由は、オーソリティ研究において敬意に着目した論者が少ない(ほとんどいない)にもかかわらず、彼らがそれを扱っているところにある(5)。

彼らの議論の問題点は、敬意発生の「原因」を「手段」と想定しているところにある。換言すれば、彼らの議論では、原因メカニズムによって示されるべき、社会構造的側面について、いかなる想定も提出されていないのである。敬意生起を一個人内の問題(目的に

対する「手段」)として処理することによっては、応諾の自発性や判断停止のメカニズムは、解明できない。

1-(2) 感情(敬意)と関係のつながりを、どのように捉えるか

本論は、感情(敬意)と関係のつながりに着目した分析である。そこでまず、本論の分析視角の1つである「関係」と「感情」のつながりに関する見解について簡略的に示しておきたい。すなわち、感情は、特定の社会的位座(position)に内在する、あるいは位座に随伴する(その位座につけば、自動的に特定の感情が生起する)のではなく、位座と位座との関係の中で時間の経過とともに発展してくる可能性がある(必然ではない)性質のものなのである。

感情と社会関係のつながりを考えるとき、社会的位座と社会関係と感情のつながりにおける想定 of 1つの明確な事例として、次の論述を紹介しておきたい。すなわち、「・・・感情は、戸田のいうように、家族関係に本来備わっているものなのだろうか。否、愛情・好き嫌いの感情、まして『愛情にもとづく人格の融合』は、家族関係、もっと具体的にいえば夫-妻、父母-子ども、兄・姉-弟・妹のそれぞれの位座に内在する属性なのではなく、そうした関係の中で育つものなのである」(正岡、1981、24頁)。ここでは家族関係が論じられているが、位座・関係・感情のつながりにおける考え方は、家族関係に限定されることなく、それ以外の社会関係においても該当しているのではないだろうか。

位座と位座との関係の時間経過的流れの中で、相互のあるいは一方の他方に対する感情が育まれてくるといえるとき、次の2つの側面(作用)が論理的に区別可能であろう。つまり、1.感情が関係を規定する側面と、2.関係が感情を規定する側面という区別である。ここで問題としたいのは、どちらの側面がより重要かではなく、感情に基づく関係形成・変容、および特定社会関係パターンによる一定感情の一方の位座占有者への喚起傾向という、「関係-感情」といった、先行研究において暗黙的に採り入れられてきた分析軸を、本論においてはより積極的に採用するということである。敬意とオーソリティ関係の脈絡にこの分析視角をあてはめると、「敬意が関係を規定する側面と関係が敬意を規定する側面」となる。前者はさらに、敬意が関係を強化(安定化)させる側面と弱化(不安定化)させる側面に分けることができよう。

1-(3) 正統性/正統化をめぐる問題

敬意をオーソリティの「正統化」に関連する要素の1つとして捉えるところに、オーソリティ論における敬意の扱われ方の特徴がある。そして、オーソリティの正統化の一要因として敬意を捉えるとき、敬意はオーソリティ関係を強化する側面で作用していると考えられるだろう。これは、PresthusとBlauの議論において共通している。そこでここでは正統化(legitimation)、あるいは正統性(legitimacy)という問題について触なくてはならないが、本論では「下位者側の問題」に限定して議論を行いたい。

そもそも、社会科学一般(6)における(正統化を含む)正統性概念には、2つの論点が含まれている。Schaarが行った総括的立論によれば、2つとは、(オーソリティを含むがオーソリティに限らない)ある力の源泉(source)をめぐる問題と、力の受け手(下位の立場におかれた者)たちの側の問題である。Schaar(1969)では、「正統性」の定義に関する

OxfordやWebsterといった古典的辞書におけるそれと、Lipset(1959, Political Man)やBierstedt(1964, A Dictionary of the Social Sciences)といった、古典辞書と比べて比較的最近、政治社会学者が行った定義との比較検討が行われている。その結果、旧い定義では力の源泉にウエイトを置いているのに対し、新しい定義では下位者側の感情にウエイトを置いている、と特徴づけられている(ibid., pp.107-109)(7)。

Schaarによる立論に照らして本論における正統化論の位置を確認するとき、それは主として下位者側の問題ということになるだろう。敬意は、第一義的には、オーソリティ（者が発する指示）を受け入れる側の人々の問題であることがその理由である。ただしその一方で、敬意の対象の問題（何に対して敬意を抱くのか）は、源泉（価値）を含む上位者側に属する問題として残されていることにも留意すべきであろう。

2. Presthusのオーソリティ論における敬意の問題

Presthusの敬意論について考察するのに先立って、敬意論が彼の議論のなかで占めている位置について確認するために、彼のオーソリティ論全般について触れておくべきであろう。Presthusによれば、オーソリティの定義は、「他者たちの中において応諾が喚起される潜在的可能性(the capacity to evoke compliance in others)」(1960, p.86b)、もしくは、「応諾を喚起する能力(the ability to evoke compliance)」(1962, p.136, 151頁)とすることができる。そもそも、彼にとってのオーソリティ概念は、「組織行動を理解するのに便利な道具立て(tool)」なのである。すなわち、「組織は、特定の大きな目的の充足を意図する一方で、その成員の個人的諸目標に打ち克つような、動機づけや方向づけの諸手段を獲得しなければならない。オーソリティは、この方程式のなかの決定的に重要な要素なのである」(1960, p.86a)。つまり、オーソリティに対する応諾とは、「何らかの方法で、個人に報いること(rewarding)」を含んでいる。報いるかわりに応諾するという意味で、オーソリティ関係は「互酬的な(reciprocal)ものなのである」(1960, p.86a)。Presthusは、「この発想の幾分かは、知覚の心理学理論に由来するものであるが、知覚の心理学理論はわれわれに、リアリティはある固定された実在ではなく、おのおのの個人的な知覚によって定義されるものであると教えてくれる」(ibid., p.86b)という。したがって、オーソリティ者もしくは組織が個人に「報いること」とは、主として個人の「知覚」上の事柄なのである。そしてPresthusの議論において、こうした個人の知覚内容は、なぜオーソリティ（者の指示）を受け入れるのかという理由、すなわち「・・・ゆえに」ある個人は特定のオーソリティを受け入れるということから、うかがい知る事ができるのである。こうした考え方に基づくがゆえに、Presthusのオーソリティ論における議論の大半は、組織ないしオーソリティ者が個人の知覚上で報いるプロセス、つまり「正統化(legitimation)プロセス」の解明にあてられているのである。

これまでの論述からわかるように、Presthusにおいて「正統化プロセス」とは、結果的に「オーソリティが受け入れられるプロセス(the process by which authority is accepted)」と等しい内容を指している。彼はさらに、つづけて「正統化は、一般に、個人がある社会や集団へと統合されるときや、彼がそこでの諸規範や諸価値を受け入れるとき、発生する」とのべている(ibid., p.87a)。「個人に報いる」とはいうものの、Presthusにとっての正統化とは、組織やオーソリティ（上位）者の問題ではなく、主として個々の受容

者の側の、ヨリ具体的には、個人の不安軽減(reduction of anxiety)・解消(getting rid of)の問題(ibid., p. 90a)として扱われている。

そして彼は、「正統化についての4つの基点(four bases of legitimation)が提出できるだろう」と主張する(ibid., p. 88a)。それは、専門技術知識(expertise)、公的職位(formal position)、ラポール(rapport) (関係において生じる友好性)、一般化されたオーソリティへの敬意(a generalised deference to authority)という4つの基点による正統化である。Presthusによれば、オーソリティの正統化におけるこれら4つの基点は「たいていの状況において入り交じっている」のであるが、「あるオーソリティの作動状況のもとでのオーソリティの概念化に有用であるような、簡潔かつ探求的アウトラインをしめす」ための分析要素として、それらは論じられている(ibid., p. 88a)。

Presthusの敬意論は、「個人の安心を求める欲求(individual needs for security)は、しばしば、オーソリティに対する一般化された敬意に帰着する」(ibid., p. 90a)という一文からはじまっている。このつぎの箇所では、敬意による正統化を他の3つの基点に還元する誘惑や、敬意を非合理的行動というカテゴリーに分類する試みや、専門知識技術や公的職位といった客観的インデックスと比べて敬意がヨリ少ない合理性(less rational)しか備えていないという想念を、退けている。その根拠として、Presthusはつぎのような主張を展開するのである。すなわち、「合理的であるかどうかということの定義とは、追求されている諸目的についてのステートメントの明白さによって決まるべきである。このように考えるとき、もし個人がオーソリティに敬意を示して従うこと(deferring to authority)によって安心を獲得し、個人間関係の緊張を減らすならば、彼の行動は、彼の立場からみれば合理的なものなのである」(ibid., p. 90a)。

これにつづいてPresthusは、1962年の著書その他でしばしば行なっているように、Harry Stack Sullivanに依拠しつつ、論を展開している(8)。かれはとくに、Sullivanの「不安軽減(anxiety-reduction)」説を、自身の理論的フレームワークとして採用すると宣言している(1960, p. 90a)。この不安軽減のメカニズムとは、つぎのような根本的信条に基づいている。すなわち、Sullivanに言及しつつ(9)、「だれもが皆、その生涯の大半を、そして自身が持っているエネルギーの多くを、彼がすでに経験している不安を避け、そしてもし可能ならば、そうした不安を幾らかでも取り除くことに対して振り向けている」(1960, p. 90b)というものである。

さらにPresthusは、敬意的感情が発生する前提条件、もしくは「原因」として、つぎのようにのべている。すなわち、「個人は、幼少期より、両親や教師、さらに組織の幹部やさまざまな種類のリーダーたちのオーソリティに敬意を払うこと(to defer)を、教え込まれて(trained)いるのである。そうした社会化、および心理的補償(compensations)に基づきつつ、個人は、一般化された敬意を長期にわたって発達させつづけるのである」(ibid., p. 90b)。つまり、Presthusによれば、すべての個人には、何らかのオーソリティ関係に入る(ここでは、複合組織に加入する)以前に、敬意を払う訓練がすでになされている。さらに遡れば、すべての個人は、オーソリティ関係のなかに生み込まれ、したがって敬意を払う訓練を施されつつ成長している。しかも「生涯にわたり学習されるオーソリティに対する敬意」(ibid., p. 90b)とのべられているように、敬意は、不安を充たす心理的利得として、「知覚と強化」のメカニズムを経つつ、オーソリティを正統化する基点の1つとし

て重要な役割を終生演じつづけるのである。

ところで、「一般化された敬意(a Generalized Deference)」という術語は、Presthus自身は明示してはいないがG. H. Meadの「一般化された他者」に着想を得た考え方であると思われる。こう考えるとき、Presthusのいう敬意的感情とは、個別特定の個人に対して個人の特有性あるいは個人が占める職位の固有性ゆえにいだかれるのではなく、上位（優越）者としてのオーソリティー一般に対していだかれているのであり、優位者のある特定の役割の特有性ゆえに「役割」に対していだかれるのではなく、個々の諸役割の結合した複合体としての優位者の「存在そのもの」に対して、いだかれるのである。敬意の発生契機についていえば、「一般化されて」いるがゆえに、彼のいう敬意的感情とは、個々の事例においてその特有性ゆえに生起する返報としての個々の感謝の念とは違い、下位者の心のなかで「優越」者として認識されるとき、私的判断が停止されて、いわば条件反射的に喚起されていると考えられるだろう。

以上がPresthusの敬意論であるが、まず彼の立論の仕方一般に対して既に出されているいくつかの評価について触れておこう。彼の理論的主張は、1960年の「組織のなかのオーソリティー」において展開され、2年後の『組織社会』の第5章「巨大組織の心理学」に受け継がれている。そこでまず、『組織社会』に対してなされた諸評価のなかに示されている、彼の立論の仕方の特徴をみることにしたい。Etzioniによれば、Presthusの立論は、挑戦的な洞察を提供している一方、概念上の厳密性を備えておらず、新たな分析図式を提示するための命題となる余地を備えていないのである(10)。Oscar Gruskyに言わせれば、あまりに急いで書きすぎた、もしくは性急に出版しすぎたわけである(11)。また、Monypennyは、別の視点から次のようにのべている。「研究上の知見が豊富であるにもかかわらず、Presthus氏が提唱している諸々の一般命題それ自体が推論的段階をこえて提出されうるのは疑問である。経験主義的研究者によって調査研究されるミクロ現象と、氏の解釈的な結論のなかで扱われているマクロ現象との間のギャップは、あまりに大きすぎる。彼の論提一般は、むしろ、読者が気づくそれと類似した諸状況への知覚やそれ固有のもっともらしさによって、支持されている」。それでいながらMonypennyは、最終的にはPresthusの仕事を高く評価して「彼の最も重要な貢献は、・・・諸制度とパーソナリティとの間の相互作用についての、広範に文献考証された論考(extensively documented discussion)にあるだろう」と言い切っているのである(12)。これらの批評は、Presthusの1960年のオーソリティー論、そして敬意に関する立論の仕方に対しても基本的にはあてはまると思われる。

Presthusの敬意論は、その発生「原因」を、生体の外的環境条件としての社会化プロセスにもとめている。一理ある立論であるが、彼の主張は、この生体にとっての「受動的」側面のみに依拠しすぎている感がある。敬意発生には、個人によるヨリ能動的な、あるいは「創発的」な側面もあるのではなからうか(13)。それが指摘しておかなければならない第1の問題点である。第2の問題は、Presthusが敬意の働き（機能）を、個人の内面的な心理的機制のみに限定し、それをオーソリティーの正統化（受容）と「直結」させていることである。オーソリティー受容の問題は、下位受容者一個人内部の問題として完結的に扱うよりも受容者の集団を「経由」した問題として扱うほうが、いっそう明確になるのである。

ところで、この受容者集団の問題の関連で敬意に言及したのが、Blauのオーソリティー論なのである。

3. Blauのオーソリティ論における敬意の問題

「正統なパワーはオーソリティ」だとBlauは言うが(1964, p.200, 179頁)、「パワー」について彼は、「パワーとは、定期的に与えられる報酬を差し止める形態をとろうと、罰の形態をとろうと、脅かすことで抵抗を排除してでも、人々、あるいは集団がその意思を他者に押しつける能力である。この定義に報酬の差し止めと罰を含めたのは、ともに実際問題として、否定的サンクションを構成しているからである」(ibid., p.117, 105頁)。一方、「正統化」とは、「自発的」服従(submission)あるいは応諾(compliance)を引き起こすはたらきをもっている。すなわち、「正統なパワーのみがかかる自発的(willing)応諾を掌握するのである(ibid., pp.199-200, 179頁)」。さらに、ウェバーの支配の社会学の論述を引用しつつ、「オーソリティの基本的規準(a basic criterion of authority)は、『ある最小限度の自発的(voluntary)服従である』(ibid., p.200, 179-80頁)」という。

では、Blauが正統性は自発性を引き出すもとであると言うとき、彼が意味する「自発的」とはいかなる内容を指しているのだろうか。willing(ly)については特に定義していないが、voluntaryについてBlauはつぎのように述べている。すなわち、「オーソリティ関係での下位者の応諾は、自発的であるが、社会的拘束と無関係であるのではない。それは、街頭では靴をはくという私たちの慣習(custom)が自発的であるのと同じように、自発的なのである(Blau & Scott, 1963, p.29, 60頁)」。このように自発性は、消極的に捉えられている。

Blauによれば、オーソリティは、正統性をもつ、すなわち、自発的応諾を引き起こすとはいえ、パワーの1種である。とは言うものの、「否定的サンクション」の作動のしくみにおいて、オーソリティは、パワーやその他の影響力と異なっている。つまり、「強制力の場合と違って、オーソリティは自発的応諾(voluntary compliance)を伴う。服従者(subordinates)に対する優位者の影響力は服従者自身の社会規範に依存しているからである。しかしまた、説得やパーソナルな影響力の場合と違って、オーソリティは避けられない(imperative)統制力を伴っている。社会規範や集団的サンクションは個々の服従者に強圧を課して優位者の指示(directives)に従わせるからである。応諾は、服従者の集合体の立場からみれば自発的であり、個々の成員の立場からみれば強制的である。衣服を着用する慣習にみられる、社会規範一般への同調と同じように、応諾は自発的である」(1964, p.209, 187頁)(14)。さらに、「他の形態の影響力やパワーの場合と対比していえば、示唆や命令に追従させる圧力は、示唆し命令する優位者からくるのではなくて、服従者の集合体からくるのである」(1964, p.200, 180頁)(15)。

このように、Blauによれば、上位者がオーソリティを行使し下位者が「自発的」に応諾する正統化の「場」は、下位服従者の集合体に存する。換言すれば、服従者集合体の集合的作用にこそオーソリティの特徴(必要条件)があるのである。そして、この服従者の集合体における正統化プロセスの原動力は、「社会的是認」にある。彼は、是認について、「ある決定」に対して与えられる、「特定の判断や行為についての積極的評価」であり、「他の多くの社会的報酬とは逆に、他の報酬と引き換えに交換されるものとは考えられない」ものであると述べている。また「社会的」是認については、「他者たちの一致した(the approving agreement of others)」是認(1964, p.62, 54頁)と述べるが、「他者たち」とは、当該服従者にとっての他者としての服従応諾者たちのことである。したがって、応諾の「自発性」は、「社会的」是認の存在(裏返せば「社会的」否認という否定的サン

クシヨンの存在)によって、担保されている。

では、Blauの議論において「敬意」とは、どのように定義されているのだろうか。さきに引用した箇所(1964, ch.8)より前の論述の中で、彼は次のように述べている。すなわち、「尊敬(deference)とか敬意(respect)は是認の一特殊形態を指す。尊敬が他と異なる特徴は、それが客観的基準によっておそらく判断される、【諸能力】への【一方的】是認を伴うことである(1964, p.63, 55頁)」。

ここで留意しなければならないのは、敬意は、「是認の特殊な1タイプ」であると同時に、「社会的是認」とは区別されるべき存在であるとBlauが考えている点である。すなわち、「リーダーシップを正統化する追従者たち(followers)の社会的是認(the social approval)は、彼らがリーダーの諸能力に対していただく敬意とは区別される。是認と敬意とはしばしば相伴ってすすむとはいえ、パワーをもつ人物(a person in power)は、服従者の敬意を博する能力をもつと同時に、しかしまた彼らの否認(disapproval)を引き起こす抑圧的要求を課することもありうる。しかし敬意は、正統なリーダーシップの触媒(a catalyst)として作用するであろう。敬意はその人物の指示への応諾を負担の少ないものにするようだからである。・・・つまり、ある人物への敬意はその人物の願望(wishes)に従う義務を正統化」するのである(1964, pp.202-3, 182頁)(16)。

敬意とは、リーダーの「諸能力」に対して抱かれるものであり、正統なリーダーシップの触媒として作用することで応諾の負担を軽くする働きをもつものの、「リーダーシップを正統化する追従者たちの社会的是認」とは、はっきりと区別されている(17)。そして、「社会的」是認および否認こそが応諾(服従)の「自発性」の原動力である。したがって、Blauにおける「敬意(尊敬)」は、1個人の内面においてさえ、応諾の「自発性」とは、関与していないのである(18)。

彼のオーソリティ・敬意論に対する批判として、次のことがあげられる。まず、Blauのオーソリティ論の前提一般に対する批判として、オーソリティのパワーもしくは強制力への還元という問題を挙げることができる。まず第1に、「否定的サンクション」が服従者集団という「場」において行われるとき、はたしてパワーの担い手が「その意思を他者に押しつける」ことがどこまで可能なのかという問題である。服従者集団(規範)はパワーの担い手に外在しているのであるから、時が経つにつれてむしろ彼の「意思」を拘束してしまうことさえ生じかねないのではないだろうか。だとすれば、「正統なパワーはオーソリティである」という定義は、せめて「オーソリティに【なることがある】」とすべきであろう。さらに、たとえ「なることがある」としても、オーソリティすべてがパワーの転化の結果生じたのかという問題がでてくる。この問に対しBlauは、イエスとこたえているようである。彼によれば、Weberは強制力が正統性を創り出すのを促進するのに役割を果たすことについて見落としてしまっている、というのである。Blauは、オーソリティ構造の正統化は力に源を発している、と述べ、「支配の3類型」について批判を展開する(1963, pp.311-6)。だが、オーソリティ(行使)がパワーの存在を前提としているとは、必ずしも言い切れず、それは1つのオーソリティ観にすぎないのである。Simmelによれば、オーソリティという「独特の構成」は、2通りの源泉から発生する(1992, Ss.160-163; 149-51頁)。それは、「人格」と国家・教会組織といった「超人的潜勢力」である。前者はパワーの存在を必ずしも前提としてはいない。また、Lukesによれば、「信条に対して行使されるオーソリティ」という観点(立場)においては、オーソリティ関係を第一義的なもの

として把握し、パワーは「オーソリティの1構成要素、もしくは派生物として考えられる」のである(1974, p.650, 65-66頁)(19)。

さらに重要なのは、Blauは、オーソリティの受容を集団の問題として捉えているにもかかわらず、敬意については、個々人それぞれの内面における応諾促進作用をもつ触媒として捉え、「自発性」をきわめて限定的な意味で想定するがゆえに、個人の自発的応諾と敬意を関連づけていない点である。したがってもちろんのこと、彼は敬意を、相互的な作用として応諾服従者集団内の否定的サンクションと関連づけて捉えてはいない。本論の冒頭で示した「正統な命令に対する自発的応諾」に対する解答であろう、否定的サンクションが「応諾(あるいは服従)」を強制し「自発」性の原動力として働くというBlauの説明は、オーソリティにおける自発性動因の説明としては不十分であるように思われる。

4. Presthus・Blauの敬意論の位置づけ

この章では、1で論じた感情－関係、さらに目的連関(手段－目的)と因果連関(原因－結果)という視座に基づいたPresthusとBlauの立論に対する分析を通して、彼らの敬意論の整序を行いつつ、その限界を明確化したい。

Presthusの敬意論において特徴的なのは、社会化の過程、つまり受容者が「生み込まれた」諸々のオーソリティ関係が敬意を生み出す側面から議論を出発させている点である(関係→敬意)。そして、そこで発達させられた「一般化された敬意」は、今度は、オーソリティ関係に対して、正統化の「基点」、すなわちオーソリティ者の発した指示の受容を促進する基点(base)として作用するのである(敬意→関係)(20)。ただし、Presthusの敬意論において、主として敬意を生み出すオーソリティ関係(親子関係など)と、主として敬意が作用するオーソリティ関係(上司・部下関係など)は、必ずしも一致しておらず、前者と後者の間には時間的隔たりが存在しているとともに両者は時間的前後関係を成し、受容者は同じ人だがオーソリティ者はかわる(両親など→企業内の上司など)。目的/因果連関という観点からPresthusの敬意論を検討するとき、Presthusが敬意発生の構造的「原因」について、何ら想定を示していないことがわかる。敬意発生についてPresthusが示しているのは、受容者という行動者の視座からみた目的－手段の連関に沿った説明である。つまり、Presthusによれば、下位受容者本人にとっての「不安軽減」という「目的」のための「手段」として、一般化された敬意が発達的に形成されてくるのである。そして、不安軽減目的の遂行がイコール「結果」としてのオーソリティの正統化という、いわば「目的連関の因果連関への組み替え」が、Presthusの敬意論では行なわれている(21)。だが、Presthusの敬意論では、研究者視座からみた構造的な因果連関上の「結果」として、オーソリティの正統化が論じられているにもかかわらず、敬意の「原因」としての構造的発生メカニズムについて触れられていないのである。

一方、Blauの敬意論において特徴的なのは、オーソリティ関係の一類型であるリーダーシップ関係において、リーダーの「能力」に対して、追従者の敬意が喚起されるというところから議論が出発している点である(関係→敬意)。そして、かかる敬意は、オーソリティの正統化に対して「触媒」として作用し、オーソリティ関係をより安定した状態へと強化するはたらきをするのである(敬意→関係)。ただし、Blauの敬意論においては、敬意を生み出すオーソリティ関係と敬意が作用するオーソリティ関係には、時間的な前後と

いう違いがあり、後者は敬意という要素とそのはたらきの帰結を含んではいるものの、関係を構成する人（オーソリティ者と受容者）は、作用の前後でかわっていない。また、Blauの敬意論について目的／因果連関という観点から検討するとき、かれが敬意発生の構造的「原因」について、Presthus同様、何ら想定を示していないことがわかる。敬意発生についてBlauが示しているのは、交換上の返報義務の履行という受容者の「目的」に対する「手段」の1つが敬意の発露によって行なわれるというものである。受容者による敬意発露の「結果」として、敬意がオーソリティ応諾にとっての「触媒」として作用し、応諾はスムーズになりオーソリティ関係は「強化」される。返報義務の履行として敬意を示しても、ひとたび示しだしたら関係が終了しない限り敬意を示し続けなくてはならないためである。敬意は是認の「一特殊形態」であるが、「服従者の利益にプラスに作用するインバランスは、指導層のオーソリティの正統化を惹起することでその統制の影響力を強化し拡大させる。服従者は支配者を正統であると是認し忠誠を表明することで指導層が与える利益にお返しするわけであるが、同時に社会構造におけるインバランスを強固にする」（1964, p.31, 25頁）。さらに、Presthusのところで指摘した「組み替え」が、Blauにおいても行なわれており、オーソリティの正統化が論じられているにもかかわらず敬意の「原因」としての構造的な発生メカニズムについては論じられていないのである。

5. むすびにかえて

以上のように、本論で検討したPresthus・Blauの敬意論は、主としてオーソリティの担い手も受容者も共に同一の組織に属する人々の間での関係に議論を限定しており、敬意発生に関して手段－目的連関という受容者の主観的観点から説明を行いつつ「結果」（関係強化）について記述するものの、その客観的構造的「原因」については、具体的想定を提示しているとはいえない。そこで、Presthus・Blauの敬意論において欠落していた敬意発生の構造的な原因について、最後に略述しておきたい。

オーソリティ者に対してある受容者が敬意を抱く原因の一つは、オーソリティ者が自らの「社会的」位座に依って受容者に何らかの価値を供与しつつも、自らはサンクションを直接受容者に対して発動しないところにある（サンクションの水平性）。不服従、つまり指示への反抗に対するサンクションは、「敬意をすでに抱いている他の受容者たち」によって自発的になされ、しかも当該サンクションとオーソリティ者が関与していない、つまり彼の示唆により他の受容者たちがサンクションを発動したのではないとき、当該受容者に敬意的感情が生起する、というものである。このように発生した敬意が、オーソリティ関係における自発的応諾（指示の受容）の動因となる。また、オーソリティにおける自発性とは、二重構造から成り立っている。1つは、当該応諾者自身における応諾の際の自発性であり、もう1つは、当該応諾者が自発的に、他の応諾者たちを強制するという、二重性である。そして、これらの自発性の原動力こそが、オーソリティ者に対する応諾者の敬意（かつ／あるいはオーソリティ者位座の随伴する価値に対する応諾者の確信）なのである。敬意的要因を包括的に組み入れた以上のような想定を提出する作業によって、他の社会的勢力と異なるオーソリティの概念上の特色は、いっそう明瞭になるのではないだろうか(22)。

さらに、オーソリティ関係が置かれているコンテクストという観点から、Presthusと

Blauの敬意論、およびその前提としてのオーソリティ論の射程について若干付言すると、彼らのオーソリティ・敬意論は、組織論の「組織内関係」の枠内にとどまっている、もしくは議論の範囲を限定しているということになる。換言すれば、彼らの想定するオーソリティ関係とは「上位者－下位者」関係なのである。ただし、一組織の内部限定的立論では、次の問題を射程に入れることは不可能である。すなわち、「正統化プロセス」に関与し参加しない／しえないオーソリティの受容者としてのクライアントが、サービスの生産と消費が次第に増加していく方向にあるポスト産業社会においては、増加しつつあるという問題である(23)。この問題の解明は、今後の課題として残されている。

〔註〕

- (1)：この文脈に関連して付言すれば、本論では主として「正統な命令に対する自発的応諾」を考察の対象としている。「判断停止」の問題については、拙稿(1995)を参照。
- (2)：本論では、権限・権威という用語を含む「オーソリティ」に用語を統一する。これらの語の違いについては、別に考察を要する。
- (3)：respectとdeferenceのちがいについて、WebsterやOxford辞典によれば、若干の違いがあるものの、のちに論じるBlauやPresthusが意識的に区別立て、字義に厳格に立論しているようには思われない。このため、本論ではこの2語にあえて区別立てを行なわない。
- (4)：拙稿(1994)を参照。
- (5)：彼らの論考に加えて、Weberのピエテート(Pietät)に概念については検討に値するが、紙幅の関係上今後の課題とせざるをえない。
- (6)：オーソリティ論における正統性・正統化をめぐる考え方においても、2つの側面が提出されてきた。それは、認可される(authorized)／是認される(endorsed)という概念である。「正統なオーソリティとは、組織のヨリ上位〔オーソリティ者の上位者たち〕によって認可され(authorized)、〔オーソリティ者が属する組織の〕下位者たちによって是認されて(endorsed)いるという意味である」(Blegen & Lawler, 1989, p.183〔〕内は引用者)。オーソリティの正統性における認可／是認という区分を(敬意概念自体には触れられていないものの)詳細に論じたのが、Dornbusch & Scott(1975)である。1975の著書のなかで彼らは、是認より認可を強調し、論述のウエイトをおいている(ibid., pp.58-64)。
- (7)：Schaarによれば、旧定義に共通する特徴は、それが政治的パワーについての要求であるにせよ、ある議論における結論の妥当性の要求にせよ、その要求する力(the force of a claim)が根拠とする基盤(foundation)が、要求者自身(の主張や意見)とは外在し、そこから独立した存在とされているところにある。したがって古典的辞書によれば、「政治権力についての要求は、要求者が、自身を超越したもしくは自身より卓越した何らかのオーソリティの源泉を発動する(invok)ことができるときにのみ、正統なものである」(ibid., p.108)。そこで挙げられているオーソリティ源泉は太古からの慣習(immemorial custom)、神法(divine law)、自然法、憲法典であり、Arendt(1958, "What was authority?", p.83)を引用しつつ、「これら全てのケースにおいて、正統性は、人為(human deeds)の範囲の外にある何かに起源を持つ。つまり、正統性は人が造った(man-made)のでもない」(ibid., p.108)。一方、新しい方の定義における正統性とは、当該の正

統性を受け入れる人々の側における「感情の問題」なのである。この立場によれば、「正統性(legitimacy)とは、ほぼ完全に感情の問題(a matter of sentiment)なのである。追従者たちは体制を信じる(believe in)、もしくは体制を信仰する(faith in)のであり、まさにそれが正統性というものなのである」(1969, p.110)。

(8): ただし、筆者の管見するかぎりでは、Sullivan自身は、オーソリティに関する言及はほとんど(1953年のThe Interpersonal Theory of Psychiatryの一部をのぞいては)行なっておらず、オーソリティと「敬意」を関連づけて論じてはいない。したがって、オーソリティを正統化する基点の1つとして、しかもその中でももっとも大きな紙幅を割いて敬意について論じるという発想は、Presthus自身によるものである。

(9): Sullivan, H., 1950, "Tensions, Interpersonal and International" in Cantril (ed.), Tensions That Cause Wars, University of Illinois, p. 95

(10): Etzioni, A., 1963, American Sociological Review, vol.28, No.2, p.312-3

(11): Grusky, O., 1962, American Journal of Sociology, vol.68, No.3, pp.360-1

(12): Monypenny, P., 1963, The American Political Science Review, vol.57, No.1, pp.165-6

(13): たとえば、個人主義に憧憬の念を抱いていた個人が、個人主義思想(とくに自律という要素)の体現者としての専門職者(professional)に対して敬意を抱くようになるとき、その個人の敬意は、彼自身の「解釈と類推」を経ているという意味でヨリ能動主体的なものではないだろうか。この問題について詳しくは、別の機会に論じる予定である。

(14): Wrong(1979, p.51)は、「正統なオーソリティ」の関連で、「Blauによる総括は、ほとんど改善の余地がない」と評価しつつ、この論述を引用している。

(15): したがって、パワーのオーソリティへの転化とは、それによってパワーの特性である否定的サンクションに基づく脅威という要素が消失するのではなく、サンクション脅威の発動(直接的)が、服従者規範による拘束(間接的)へと転化することを指している。

(16): 「諸能力」の内容について、Blauは必ずしも明らかにしていないが、別の場所で「貢献能力(abilities to make contributions)」(1964, p.56, 48頁)と述べているように、貢献行為をする能力であろう。そして貢献とは、ヨリ具体的には、共通の福祉としての集団の存続に対する貢献のことを指している(1964, p.46, 40頁)。

(17): リーダーシップは「オーソリティの一類型」である(Blau, 1964, p.200, 180頁)。

(18): Blauのオーソリティ論の全体像やパワー論との関連、そしてかれの社会理論におけるオーソリティ論の位置については、J.H. Turner(1991, The Structure of Sociological Theory, Wadsworth Publishing Company, pp.335-337)および、長尾(1975)、(1979)を参照。また、Blauの交換論における問題一般については、Mulkay(1971, Functionalism, Exchange and Theoretical Strategy, Routledge & Kegan Paul, pp.191-200)を参照。

(19): 彼はこの立場に属する論者として、Nisbet, Comte, Tocqueville, Durkheim, Bell, Parsonsを挙げている。また、オーソリティのパワーへの還元という立場についてもLukes(1974)を参照。ただし、authority概念形成の歴史に照らしてみると、オーソリティのパワーへの還元という立場には、無理があるようにおもわれる。ローマ社会にまで遡るその形成過程については、Kriger(1968)を参照。

(20): 「オーソリティの受容」というとき、オーソリティ者側の存在もしくはオーソリテ

イ関係そのものの受容と、オーソリティ者が発する個々の指示の受容というレベルに分けて考える必要があるが（拙稿1992・1994）、Presthusの考察では、前者を所与とした上で主として後者にウエイトがおかれている。Blauの考察においても同様である。

(21): 目的連関・因果連関、および「組み替え」について詳しくは、下田(1981)（第6章・第7章）、大塚(1966)（第1章）、佐藤(1976)（18-22頁）を参照。

(22): これに関連したより詳細な考察は、拙稿(1994)で行なっている。

(23): これは、換言すれば、組織内正統化プロセス（是認）や正統性源泉の根拠の1つ（認可）への参与者たちとクライアントが、全く隔絶しているという問題である。大組織の医療従事者－クライアント関係が、その典型だろう。この問題は、次の機会に詳述する。

〔文 献〕（邦訳については、変えたところもある）

- Blau, Peter & Scott, Richard, 1963, *Formal Organizations*, Routledge & Kegan Paul (橋本訳『組織の理論と現実(上)』ミネルヴァ書房、1966)
- Blau, Peter, 1963, "Critical Remarks on Weber's theory of authority" in *American Political Science Review*, vol.57 No.2
- 1964, *Exchange and Power in Social Life*, John Wiley & Sons, Inc., New York (間場・居安・塩原訳『交換と権力－社会過程の弁証法社会学－』、新曜社、1974)
- Blegen, Mary A. & Lawler, Edward J., 1969, "Power and Bargaining in Authority-client Relations" in *Research in Political Sociology*, Vol.4, JAI Press, Inc.
- Dornbush, Sanford M. & Scott, W. Richard, 1975, *Evaluation and the Exercise of Authority*, Jossey-Bass Publishers.
- 藤田哲司、1992、「権威関係の時間プロセス」(『社会学年誌』、33号、早稲田社会学会)
- 、1994、「権威的指示の受容原理－権威現象の安定について－」(『社会学評論』、179号、日本社会学会)
- 、1995、「権威に対する私的判断の放棄(surrender of private judgment)問題について」(『文学研究科紀要別冊 第21集 哲学・史学編』、早稲田大学大学院文学研究科)
- Krieger, Leonard, 1968, "Authority", in Wiener, Philip P. (ed.), *Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas Vol. I*, pp.141-162, Charles Scribner's sons (川崎他訳『権威と反抗』、平凡社、1988)
- Lukes, Steven, 1978, "Power and Authority" (伊藤訳『権力と権威』、アカデミア出版会、1989), in Tom Bottomore and Robert Nisbet (eds.), *A History of Sociological Analysis*, Basic Books Inc., pp.633-676.
- 正岡寛司、1981、『家族－その社会史と将来』、学文社。
- 長尾周也、1975、「権力と権威」(1)・(2) (『大阪府立大学経済研究』、第29巻、第1・4号)
- 、1979、『組織体における権力と権威』、大阪府立大学経済学部。
- 大塚久雄 1966、『社会科学の方法』、岩波書店。
- Presthus, Robert U., 1960, "Authority in Organizations", *Public Administration Review* vol.20, No.2
- 1962, *The Organizational Society*, Alfred A Knopf (弄里・曾良中訳『巨大組織』、ダイヤモンド社、1965)
- Schear, John, 1969, "Legitimacy in the Modern State" in William Connolly (ed.), *Legitimacy and the State*, New York University Press, pp.104-133
- 佐藤慶幸 1981、『行為の社会学』、新泉社。
- Simmel, Georg, 1992(1988), *Soziologie*, Suhrkamp (居安訳『社会学(上)』、白水社、1994)
- 下田直春、1981、『社会学的思考の基礎 増補改訂版』、新泉社。
- Wrong, Dennis H., 1979, *Power its forms, bases and uses*, Basil Blackwell.